

恩納村の言葉に見る

しまくとうばの多様性

恩納村史「言語編」専門委員

下地 賀代子

去る12月18日と19日、沖縄県しまくとうば普及センター（2017年設立）主催の「しまくとうば検定」がありました。3回目の開催となる2021年度は、小学1・2年生レベルの9級から中学2・3年生レベルの5級まで実施されています。また9級のみですが、今年度は「どうなんむい検定」（与那国方言）、「しうまむに検定」（石垣四力方言）、「とうぐちくとうば検定」（本部渡久地方言）の試験も行われました。このような各地の言葉の検定が、今後、しまくとうばに関する師走のイベントとして定着するかもしれません。

さて、2009年に国連教育科学文化機関（UNESCO）が消滅の危機に瀕している言語として琉球列島の6つの言語「奄美語」「国頭語」「沖縄語」「宮古語」「与那国語」を含む約2500言語を発表して以降、琉球の島々のことば、すなわち「しまくとうば」が危機的な状況にあるという認識は、少しずつではありますが広がってきているように感じます。ですが、一口にしまくとうばと言ってもその中には実にさまざまな地域の言葉が含まれているということ、つまり、しまくとうばは多様である、ということとはあまり意識されていないようです。海に囲まれた「島」ごとの違いはもちろんのこと、集落や生まれ故郷といった意味での「シマ」ごとにも違いがあります。例えば「太陽」を表わす語を見てみると、恩納村の中だけでも、「ティーダ」と「ティーラ」の2つのタイプがあることが調査によって明らかになっています。もう少し詳しく述べると、熱田、



安富祖を除いて北側は「ティーダ」、南側は「ティーラ」ときれいに二分されています。今回の恩納村史編さんだりでは、「多様性」をキーワードに、恩納村の言葉をいくつか紹介いたします。

恩納村「言語編」専門部会では、現在、『恩納村史 言語編』の執筆を進めています。この『言語編』は、第Ⅰ部「恩納村の方言概説」、第Ⅱ部「方言分布地図から見た恩納村の方言」、第Ⅲ部「恩納村の方言の語彙（和琉辞典）」の三部構成となる予定です。第Ⅱ部の「方言分布地図」は、例えば「月」という意味の語を恩納村の各集落の言葉でどのように言うのかを調べ、その語形を地図の中に落とし込み、見て分かるようにしたものです。ある単語の語形の地理的な分布状況を視覚的に捉えることを目的としており、「言語地図」とも言います。言語地図を作ってみると、恩納村の中でも言葉の違いが少なくないこと、つまり多様性があることが窺えます。図1は「月」を表わす単語の言語地図です。この図を使って恩納村の中での分布（違い）を見てみましょう。

しまくとうば（琉球方言）の「月」を表わす語には「ツキ（月）系」と「ツキヨ（月夜）系」があり、恩納村方言でも両方の系統の語が使われています。ツキ系について、「チチ」、「ウチキ」がこのタイプの語になります。まず「チチ」について、ツキ（月）のツに当たる音がツ↓チのように変化しています。またツキのキに当たる音もキ↓チと変化して、前と後が同じ音になっています。「ウチキ」は恩納で使われている語ですが、「御月」に相当していて、ツキの部分の音が前と後で違ってきます。

続いてツキヨ系の語を見てみましょう。「ちちゅ」、「ちちゅー」がこの